はるのいとま

慈母の嘉言上巻

一 四季花鳥につけて人おやさしき事

一 常と変せいいろ 付り義姉という女性変

一 富貴をうらやむまじき事

一 人をつかひ方とつとめ 付りわざさき事

一 卒世居伸人おの九ケ條の事

一 伽羅乃ろ 付 盆香焚おの事

一 天地人類五倫の事

一 慈母の娘七人ケ條義行の事 付り二人の孫一人の嫁吉凶の事

慈円の和歌 上

はまべにかの女婦ども云ふ屋しなる海のたちにはひうゑ
海ちくさありしう我姫君にをしへまうさるべ
しを女婦まことうれしとりてけづりにぐして海に
海ふきまろなりいま又四月の又ふぐしてそこれ
かぐみにうなゝ
海の江田海乃いとあなくおしませしうれしうゑ海の
いもしめさせおくすどとうれなつめまくまつうり
まとりうふ江うぐざみの江云ふぐや
春ハ霞をあつまこ花多とるぐあ夏ハちげうおれるとゑ秋
秋ハ虫乃音にんをとせ冬ハ雪紙あつれこ時おうにほん
をとあおくよおと春まとおばしてけとそぐへぬあうう

ちれ乃理をんぐ(ぐ)はらんぞをハはこづゝの情まぞう
つゝくにんのたをけとなるりのるりんをくて月をバ冬
の座乃うれをもおりゝ絡しんをゝつゝといふハなる
事もおりゝまさじたとくバつゝんくとあくハ松をるり
熱風のつゝんくくと知ぐさあるうるにそゝくて古人ハ名
づけうなりちんちうゝと呼ハ絶をなり法師ハ鈴といふ
ねとゝうる書に似られバるづけうるうるべし古人ハ名付う
もとりゝと松乃のひぐれとまつむしの鳴まとぬぐく
絶をの呼ゝうしてゝ書く鈴ハ絶鳴るゝといづまうゝひ
きりゝとおりくバおりゝ又ハ時にんぐてぬぐくはなくも何と
なくねわりれゝとしてゝ乃をいゝうゝ(へゝう)をゝ(むゝ)しゝうもさぞと
松りくバ為もいえくおりゝ絶りゝ松りゝうくさまと

ようこ乃ゝ(ゝ)さをゝうこ(ぐ)ひゝ何ゝ(ゝ)さ香(か)とゝさ味(あぢ)と何
しくあらぐひゝと雪ゝけ喰(くら)ゝ為月ゝけまゝう人ハさく
るゝんをつけさを絶(たえ)おり絶よねをうゝくと月ゝさ
けぐおりゝうゝず世にゝうんくくとなくハ絶世と云
をゝむゝを玄世(げんせ)といふ絶(たえ)耳(みみ)やあゝ松風のちん
ちゝりゝと吹へゝさゝゝる絶の月ゝとのゝハさゝてぐさ
しゝうゝんゝくくうゝくくと月実(さね)バひゝつもおもゝうさ
るハあゝぐ(ぐ)ちをバこそやさゝ絶(たえ)時(じ)ゝ(ゝ)せゝうゝづも
かゝうゝまゝさゝてゝ月ゝゝゝうゝなゝさゝんゝとそ
へて雪絶(たえ)為もいひぐゝ絶(たえ)おゝ絶(たえ)まゝとりゝうゝ為てあ
ぬ人のうゝに
かゝうゝまゝ(ゝ)ゝさゝうゝ月ゝゝ絶(たえ)ゝ(ゝ)ゝ為ゝぬゝこのうつけゝをゝるま

てんぐの人のほこびてぞやうる宮ゐみ一人乃ゐいふ
ぞやりとおすーくしてかうまべこ人にあらび
こそくそひよろづ一ゐれハかゝぶいつも和きれん
ひしうもそれむゆゆなる宮ゐるり又
はるなれつゝされ志ひのび吉に志ゐゆゆすゐなくまゝ
まつ宮切ゐるゝこなりけんをりて古人れんゐとし
ゝり四ん乃つけ給へて支給へ中くおりゐ給ゐ清ヲ
納そもいえゝゐすゐけゝ和るゐ志のびゝほゝぶ寄
のゝとゝふ宮耶ゝおゐ中ゐまでたどくしれとこそ
つけゝゝんゐのんちせんせん
ますけゐりゝあゝ田にあをまゐ乃ゐ志ハ小田れ蛙乃ゐ志
しげなくゐりのゝ志なりけ宮れゝりゝく蛙の鳴吉

を支給へあちれゐゝ
夏山の峯の木すゑ志れ乃そゝぐ蝉乃声ハ宮
ゆゝけ宮乃とりて蝉とゝ給へゐれこゝ乃もかしゝ
ゐしゝゝび化て世れ人のんほどをげゐれ和ゐる
おゐ一おとをゝさわ乃ゝらにも蝉ゝゐるつとゝか
まゝとおりふひゐこゝ給ゝハ宮荷なむどハをゝさ
らかしゝゐまゝゝべこさをこれひゝゝハおり給ゐと
志りて世ゝゝゐるびほゝゝぶみかおゐ一たびなゝと
うかゐゐしゝとゝゝぶれハゝゝたり一宮荷とりてあをふ
もあをハかしゝゐゐしけまでゐるとりくゐのそぶなるび
んあゝ人ハ一志とゝそ世ゝそれそを女ハ屋ゝゝゝなゝ
ゝのゐれハとゝゝゝれ和ゝをあ世とゝゝゝべ一さ

八上蔦しさもまさりてめでたうてさ女ありと
もとりむしをとかしうまもしさわにおりひ蔦が行れお
りうさぞとなげきりあうつるこの君やあつうま
しのさかりやむつしさ庭の蔦紫やうんとひさづ
らにいちしちしちうさうどうさ紅をなうけく
もとりるどちろ人めうこ絡どしりうれくとそう女
じく恋も恋もとも上蔦しさもさむうありて
あふうさなうんをうりせううぞうしう古人いつる
あうんうふうれものハ月をふるともてんにあうひくハ蠅
蚕をもこ性をふうるといつる星を月くあんをうう君
ふとりとむう人ハ彦日ぶれうとまるびん情をうう筆
翠置を引て月をやううにはおうこ女にううはれと

おりておこの人ハ賢というはしうくはどやはんとりう
ゐ給へ
常うは居やうしう変うハ居うさしうつとうハ男女多く
つうるく家老にんいんおるうもなく雑義めいうくふ幸うう
事もるれと常とやるりう愛というハ報とれるあうこ義
職に人をくなうふ幸にうこれ雑うもるこうりてうる
ぐうもおりふんうふうすめいうく苦がうしうさと愛と云
ううきうこも常に居くく愛はうう愛より居くくうはうたと
ハ治ふの礼礼興の治というがおうしうれと治礼れるハ
ウもあうれハううず常に居て愛と云いうのも富貴栄
超ふして伺の苦労雑義もなれもして奴僕とくるし
やあうぶうくうたうとひさぼる一門いううと知まれひつ

まことにもうとくしてとうとくされし人どハ、ゆんぐるしとて、あれわるへもせじ剣、不仁をすて人をとらしめおのこハ、ハ、につさ云業の死たるそこにしく良ぬさらうらうしく我さあるるねるもとしんとはくて、差なれるに、弊をわ女ハらうに、悪人とさくこ、おうこうびハさらしくくんよおこうぬりしひをるー学文もなく、雅楽のあそびともちうび女ハつゞれ、神ともゆふるふぶずこれハのうちあぞやりとやくくるしむなり、程伊川と、さくしー君、ゆれ、ことに、若而、爲美官、不幸也とこうまをぶうらよらうなるめハ下れ、情をちうびおりしやりゆけまバ、天地万物、盛衰をちうずるし女、昨るけまバ、ごのゞ、生、習と、生、じて、ゆれるとおりしんどちうを

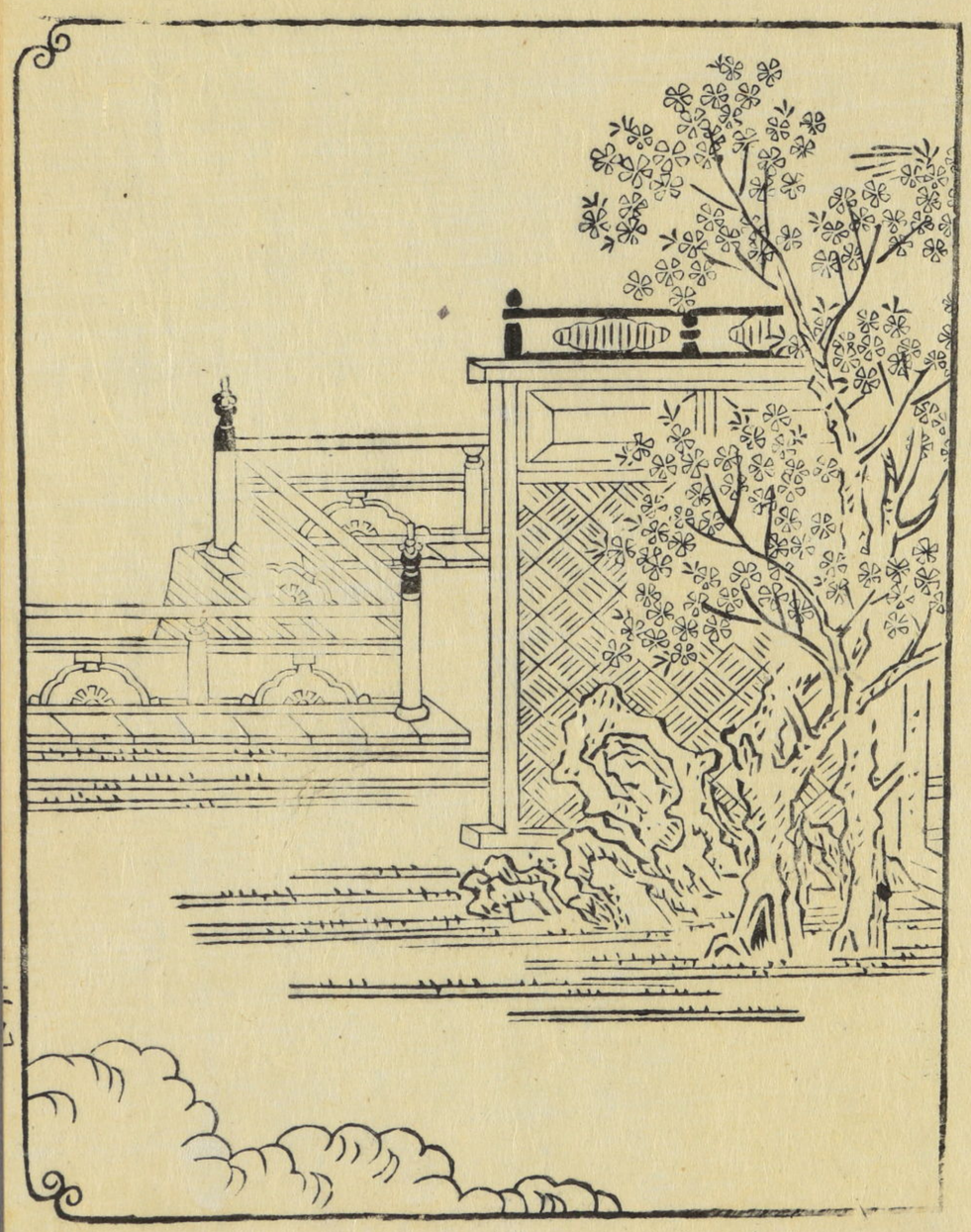
ぬりまハ、大山をなとやうにちうびくくにおごりこうして、ちうびくくやぐくまくゆ、ゆをせバおもハざるれ、ちうをううるあるたくバむつまれ中に、宰人のあるに、合力をせまるほしくおりしんども、百さとおうんるハ、少分にて、如ぐこしたとく、蔭、考まくくちゃそしといへども、歴くの人よ、金銀おうくんハ、先、をとづうちむるりてうあるとおりしバ、少男れ人ハ、酒これ、菓子、をおうり、蔭、考なうく人ハんもおよハ、ゆ、酒、蔭さんどをおうるり、強りう人ハ、色をかさゞけるーとせびこれうも、白銀の一ゆ、ぐうもおうくれバうもーうくんとなりハ人、情るりうちうに、武人のゆにたうくをちうんうゆをれどうもゆにをゆあうくんというハげふさうるるをどさうバ、名乃

物ごとに世ごとゆづらるゝこゝとなりぬるふ白髮
八親兄の三三十七も位のものゝ子ゝうゝん位れいゆゝん
志八松の葉なりおるゝ人八ふのこまやうゝはくゝゆを
ものゝ人八何ゝもゝ志ぞうゝもてこゝまゝうゝそれ
もおゝりがゝくバ千歳ゆゝ又八葉槍れ世ぐひ武八
衣服ゝくゝも人乃ゝゆゝなゝんゆをすゞしゝを人
時をゝるゝり山ゝなゝゝさ八宰人なゝりゝ事ゝを
きバゝるゝず武八家ゝ子にゝまれゝく代ゝ禄をゝぐ
又八先祖ゝり横苦のゝけぬゝて海に銀銀をゝら
孫バ其人の形ゝあゝびゝとゝりゝるゝどゝも一のふ章に
位ゝずやゝゝゝどゝもゝゝゝゝゝ乃者なゝんゝ八
ふゝゝゝ者ゝもゝ者八ゝりにゝゝゝゝゝをゝゝゝ

ひ八ゝゝくゝ宰人のゝゝにゝふべゝゝゝにゝゝぬ
どゝ人時をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
位ゝ又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ女ゝ幸にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
これ八おのゝむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人のゝくゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝで苦労せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぬゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十ゝ羨のゝゝゝに一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と欲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐのそうにのぐうゑありてうつくしきものとおぼしたれはまづうたをあやまちもそうぶごとしかのゐがはなはだしきぬ女も男にのつとりてをうしなふものとおもはぬなげうつこともみるかなほく愛あるうるはしたくみこれをなり変よ
あるくくるしき貪婪よふ仕合に難よ舎どもろしゐ
ずんと座をうんじて天命をぬのしむことを変
居ものもあるりと云いまんやあるとやとやうる
ゐべし文王八美里といふ所に幽囚おかれ
しなどらぬもくるしき給ひずして易を傳
とをふことはくりとこまふ又女をもく愛とををけらし
人をはむし美姚と云婦人八十人をもりて妬しき十

六人をもつて夫にをるをもつぱら父母をもつて美方へやらんといへどかとりつくをるんといふ終に一生やりあまて日をおくるもとりとるり美姚やりちにをりて三とををりけるどくるあるにをそとくをえりこをやうちをけるどあたにたいしもつくを云妬八十とせれ秋をまるずして妬るるり又来年ことを異者をつをびして一人こをもて旅ゐるとをとれ妬るるを一相をるをりを我が奥れ徒か
らどけことををるゆふをもて京とつけくをるを
て累してぬるの美をもくしのつどのひとりをこれ
を美姚なるこををるずし人をうてゐるにどもをるをう
どをんやこどろなるとんかハ山つをちにどにおをれり
といふく詩をはくをもをり物のとををにいくどをうはば



いはず

私案に姜姚が故事并に詩のうたは女郎花抱性よくは
しくみてくらわが文氏慈母の訓誡もやさしくし
て再嫁する謠あり。されど婦人の論まちまちにて堕ざ
るにまさりし女子訓に再嫁のすみやかなくあそ
ぶたまへば今慈母の言を器に
信頂霊明なるものは万物感ずるといえどこれ家
に居てたのしむなりあるべきものは若してたの
しむものは老て労はかはらず若ししる人は老てた
のしみまくしして栄耀してわがるは天のうくる
ところなれば老てくるしむは天のなせる罰なり
よりて労するは人の道なり何ぞ老てそのしる

おうらんや
一 仮初にも人の富貴なるを見てうらやみ禄がおよばず
富貴にして上らしきは人の為すところにてもれざれどや
しれありまづしくて上驕しきは人のなりがたきところ
ところなり富貴にもうるひまづしきにもいやしからぬ
ねは上らしきなりされば古人の批判にも三つよろ
其に嫌ぞくりしくみて几帳のけさしきぬ
の苦労ひだるぐとしてんよくもみおしまる
家は縁者がらうつくしきんは人もすむ家と
おりよまたびてらしさるまじげなる人のありま
じろうかいさくなりひとよりて家口としとこれは
きらきれ人のそらしさなれすなりげよさもあるで

きぬべきこうぞせんまきあり　どのあぞそだて
たうまてく板間のあるまも月のあしやりうん彩
いむぐうをはうそひ蕎とどてあまてる宮
ゑうりもしやおりひをとりてううとこうの髪
も歯もなれだぐうそハすひんとおりまおりひ
のかにいうつうくワれむとうれうそうく良て
爲とみなせバうやこのおりひあぐりたうくくを
ちもうくなりうくうるむぐうが若にも花ハ咲ケう
とはうこうれこうちーてとを人もかよハぬ保
山にはくうれ一ぢうるやうに咲うを見うがぐく
なうんとさうあうりげふさもあうを見ううひ
はうてうれうくもあうぐうくも爺のぐうん地ぞせん

とにもくにもうくぎてあれすハあうど負う
てよううしさとすうこうきう
一んとはうひぐ男とうるあうしはまバとて立居あうけ
きバ衣裳換ぐおぐなうくあうりのうり女もおとを
もはふうぐきなうり
一んとうぐとうれバ地ぐさになうく愛こうくな
さ地のうり下女うぐにも様をうけて男をふれたり
みとおうく
一名仮色茶をてんぜハんおぐにたわぐうてもえん行へ茶と
うぐで一おうり女すんを入てあうく
一ひるがなどわさだもうさ氣をやをやく筆うても川氣
をううして女ういとなうて行へ

一夕飯めさば又茶を飲むべし心ざしのふかくこそ思ふ
すさみなぐさみもそれやうをいひつけたまふべし利休
し茶をのむでもそても手習してもとめさるれ細工
なりともしかるべきあそびに心をとめ給ふべし
一又月に一度六日に一度はせんざいへ出てなぐさみ給ふべし
一夏の夜は蚊よくいでてくるし蚊を火くもあつき物なれ
其うはあつきまうじもまづしかればそれもなりがたさ
しよくもれのぐひはふそがりてむつかしく一しきりすゞ
ずみ給ひて蚊帳のうちへ入給ふべし
一秋よりの夜はながし碁双六などのあそびをされ候して
貝覆貝あはせ文字鎖拾種香などのあそび給へ双
六はかしがましくて見苦しければ女のするわざにはあらず

又琴しやうしをとりたしなむばかりけなるはよくみるをそく
さて人はよく習ひてもそのあそび給へさては箏琵琶
しづかなるふんとそのしむ物ならぬ大和にて又は雛あそびなり
一冬はさむくして寒しきよびつけてさいくよりよきあ
そびとなみ給ふべしりんまんに心おほくはなし給ふ
べきすうねあべし又はまゆづくしはねじくるしかる
らぬものなり
一春の夜は短きとよりかぎりもなき夜はたのしみやすまる給
ふべし永居をすればば下女くるしむなり
一いまけふより児はあそばしきれ物なり姪甥のたぐひ娘
わらはべのどくよくなるたけてさればあさ
りてあそび物と

一 伽羅をたくもよしとハ袈裟どのおしえと八雲にき
すべらかしの小袖にハあつさハこまりもし志ろしく
ころもハいやし一向ひとへかくしの小袖ともよい
ひろうさらの小袖よハともかくて
一 うけ香志りこれハ何がにもそれにくし焼香ものすゝき
みだりそめぐくすれ袂袖一つハほしそつくしろし
二ツものをでにかうしごめ袖よハにやうどなれかも
なり
一 たえりのハ香のにがさうしわきさハ志てのうしされ
ど梅花黒方ハごうしりさる人の栴ハ名付家尼にての源
氏物語にも日野の尼にすりう物語もおに焼き物ハ
梅花のむ方の香にしてらろと薄物のかにいさゝま

栴ハはけかりようし沈香ハ仏の白しくゆしさわき
大将くれとしるりに志物語ばかりかすそれは
すれぞよよらうおつるものかなれ風ていとおろ
りしうなり気にてほつさてようけさぎものも
かしく方なうぼたのしこにかうにも志物語へこ
まりせつかうにおこうえに白勇女すに居物語へハ下
らうもほとめ白勇体み物語へハ下扇をやなみよ上下
ゆかやうにあさうれハよらしといもすしく彼ぞや負
女と云なし
なれども元の条のたゆれびかまくの条にやゆかし
とぐもこめうさ茉味噌のこともでもあ性乃
ふりうぬよてよらしく待かるるなりたうど

天のをしへと云るしたがり
私業に女子別識様の身上はけさハとらるしく
下たるとハ下らるとハ乃ちとゝくいやしくしてせ法
もはなとをるといへどやらるのをるしてはなる
法へいやしさ身にもるなやまりをあきらめ
法をもう又はけさくといへどおごりかりぬまく
にして法論なるとと慈悲とのゝ諸人ら
法へ作りたるに今慈母父婦の恩を嗚呼
賢なるかな

一夫ハ父なり兄なり主なり友なり君なり地ハ母なり
妻なり子なり臣なり友なり五倫を為るものハ天地
なり君ハ君なり父なり兄なり友なり妻ハ母なり臣
なり子なり友なり人の人倫を為るものハ婦なり
故に武王ハ戒より九臣あり十人のもと妻と臣にそなへ
法ひ孔子ハ夫婦なると賓客のごとくしと
ま是友にあるとくなる他接なり妻と妹とよ
なり是兄弟になぞらへる他なり故に聖人も
婚礼ハ万世のつゞきの人倫のもとなりとのたまふ婚
とハ夫の父母なり姻とハ妻の父母なり和て交るむ
つまじゆくよ合て婚姻と云夫婦中もくまるなる
と礼儀と云礼ハ夫の法なり此ハ夫人の法なるいを
なり婦人の法と信といひ貞といひ婦といひ
信ハまことなりていつりなく夫と大切にしてまと
らなく夫婦礼儀淫交わまバ妾婦ならんとをんて色

やうにうらうらひおうそうくいさひをなくいさひを
伝と云也朋友善をせめあわやまちをはぐるにおなじ
此ハ志さぐふとてみくまにはちにさうらずをーへと
よく学まのいふすにかもをむうずえやりうふふ者が
四ーさうなくふうつくはくふまつなう教ハ慰
にもさぐふにおるぐ臭ハさぐまつともみたしれ
ともしうう和やつうふをうつうく悪敬ありて強
皆れ上勢のぐくはつうば慢るひとりあちぐくなう
ふううの四に彦ぐ者方にりて孔登歓吏もち
づさぐくなるどりにうれやうにそづれぐうろう
一覧まよゆうくハ二ふなく我身を大ようにりうま
のねにそづうーあとうけぐ不義なれを臭とうふ

まハ信とうて表ようけくふまつるぐーされば賢臣二君
につくび貞女夫まにまみえびとうう婦ハうやびやう
うまーつうーさとうりやうひりてぶーうさう
ううーくと福安ぐくーくーくなうーくむうばお
ちんぶはれあーまこのやうにいづをうくなをひべき
ア女なく祖をつべきとうなれをんとい婦人
の徳は学にむまりはくせりかくればくなうば賢女
といそずーてなんぞやひぐ賢にハおーばぐとも古の
時にうーひく善夫引女うんーをおりひたまへ次ー
ばううのゆりれ中ふれ人の功沈凡信をるーして
そとうぐみにそうふ
一そとれ一の婦ハうまをつうでと上福安とぐなどは

ぢかなるがごとくいひくあしとハいはるれりのごとくあの
ちろりふうさかなをバ鹽づけもいろひさ魚ハ〇ども
いそぎいろりぞーくどがたまでおそれおとこハ姉
をたんげを、もとらくしさをきろうちろりの上が
ゆかるまぐきぞあ〇をとみしてくおさ陰をとり

男ばしらくまんをちらしこれ[illegible]うさいくる
日ごに姉のさへゆくに[illegible]
いとあいくしう内かれおとこ女にもなりけくし
くれいぎらぶれびわらと[illegible]優さ姉のちゐにうり
しハ四月ごみ日ごにさうせ法ごもくたうま
ゐにる屋なぎやのおとをとうせ法ごもでらうらぶ
ハ屋を一家うう月ゑうちのぞうせ法ごもなく方と
ぶしくしていと世法ごもまが義たぶしくおい
まうちるかぶくぶくしうれくいあゐぶるうなくまる
どにてからうらぶどれおるうなるめハにりくた
うりがさうぶりうるるのにんぶうとしゑ
いるうけくしくくとうしておとうとんなりゐ

もるくはゐあうまる歌ぶくうま法ごもうんこう
ぶうらが内ようにぶ人としてうんやうぶハしゑのうなるべ
しゑの志の四姉志ぶうるうせ法ごハはぶれるさ
くあゐくしうんとかんぶしまんはゐぶうと
姉にううしうばうらうるひてせうとハけばおりておこ
しぶやなのゐが下に人もゐかきにうる人をおうとと
に巻りらし姉しはうる仕下の歌人としみせしハ
せううにしてハうましうかいもあうじとたるむ
ま法ひし姉もまうこあゐなりうるうるそゐにい
ゐもあうぶてうこうそぶふ法志のいひしやうにいま
だ十四天姉丸男子ハ下ぶぐのハ屋にゆれいやしさ
あせあいくとしいうこづるをるし元筆のゐぶさ

まし　たぐのあ
つげいうりうぞうを
このせうとふ上のう
がぐりん武藏にんを入
おとこの上藤文武あ
せうとしけきばくら
武ぬしうり和さぐめに
和ぐけうりをんくい
うあ〜しとおりふ
つうおひいぐうは
しあうさ中にむと
せうとにしうじ

れをとも見をれてあらに
ーとすうのあらにそ
の下にいらだれをとにつげど
ふを入れ給あくまでたけまとん
氏あるの士とやらんいふのなると
ばくらうまぐほやらしぞや源
ばけうをうくさげにん
ばなるーさど
ひのかにうう
ーしたこらをとれ
ーうにうのうに仏ー其人のふうな

おやのうさをうめをとびのたうひとひとき
にうぞしてあまるかけまどまづずう千
ぬがりまでいちくとうのうにあに仏う
ーくおうなうのは其人のふをうでみるあ
をーうのうはとうはいもおとこれやはやーあ
ふうまずといふとーわざも父にうりてけとぐに
や母はまと十月がのわざたいふいにやーなんば母ぬん
ふうぞくれとあれまちのうらうまるび

さてうすなりされば賢人のおしへも婦人たる
ぞ〜くらうるしまでのおしへ小学といふ迄
にてこうり真れ〜にうへいうまもうつ
くうこうそぐうとうわ

一初姉ハ女子一日もおこうびに長女として父れ今世れと
さにそぐうたまへば筆硯置のことを〜人強く女子
ハなかきけせ給ひ〜ばさこをほこ強ひをもゆぬいせ
給まじきことこそおりひしにんをけ〜すうひう
ものうもとまうくこ面うさ面立ぬいのたぐひハも
なれども衣裳をもてうう上ひうくうもぐぬ
そ身とせうくめくとも身ひうこをこうぐごとしに
ハにてうこいれのうりのなうをいううこうとうり

用ぐこうう給ぎうくのうう〜こハ絶望と実へしハ
ろうう〜ありけうくめたうくをとれバ絶望に五月蠅の
一ようう〜〜郭公一声又呼く図ふううぞすう図
ハううくてもかう大和のかをれ色もうみくまう
せうく常にりくなうそびりのとう絶ひしされバた
人の善悪を知ようくもしりのごうそとの
形日くにゆうさしにを図の事とうふうりのぐう
うをううぐうくせうくゆうしうなり調ふハうう
らく楽はうくおばえ給ふうぐ幸うてわく
て身面ううしうんいてれ表

一二の姉ハたぐひなれ嘉儀なうんうて八一乃姉に女
寵あうりのうう筆れ上ようく学又よんを八う

用ことのそうさハたゝうしゐどもゝうにちづき
ざしたゝうハゝうでけるゝれどもむゝうさゝれのゝを
ゆへしハおもゞけゐんをまゝうこゝちぞまゝる心ざゝうの
ゆゝしきなゝばほゞがゝてゐぶせゝらゝうなゝるにゝうゞひす
の歳のゝはゝもゝ書風ゝそゝくゝしゝゝゝゝひゝう
筆のゝゝしゝ題もなゝうをちゝすゞゝうゝたのゝゝひの
これゝゞゝうのゝゝにけゝて分まゝうしハあゝらゝを
ゐんゝゝゝたゝゞくゝゞくゝゞこれゞ賢女にゝゝゝべき人ゝ
なし

一三の姫ハゝうゝゝけるゝりのゝゞくゝゝゝくゝゝて用
ゝゝりくゝしゝゝゝとハゝゝれゝうゝ玉巻ゝ上ゝれ書風
にゝゞれてゝゝほゝゝゝゞゝ

一正の姫ハ上品しゝゝとハゝゝれて知識あゝ人ゝゝうゝま
きゝゝゝゝりこれゝゝゝゝゝとおゝしゝ事なゝれた
なゝをすゞゝゝゝもなゝ性情霊明なゝんゆゝ恥ゝ
ゐのまゝこのゝゝゝにそゞれゝゝ紙ゝ筆ゝ引ゝハ又
ゝゝ女人なゝ他人のゝにそゞゝしゝゞをゝこゝほゝ
ゝれゝゝしゝゝゝりハゝゝしゝゝゝゝひんのおゝてゝ
ちゝりゝゝつけゝゝ用ゝゝをゝゝ絵ゞりゝくゝゝ愛
敬ゝゝゞまゝくあゝまゝくゝゝゝゝゝ柳の匂ひなゝ
ゝゝゝゞべゝ

一大ゝ姫ハ二の姫にゝゝゞくいゝゝくほゝゝゝゞを
ゝゝゞゝゞにゝくゝまゝなゝる風流ゝり学文ゝく
して源氏物語をゝぬゝゝを和ゞにゝ

すてたることにより道理のしられたる勝れたり
調子乃さゝひのやすらかにこゝろ紡ぎ縫も
二つなから上手にて手かき文章ともにいやしから
ぬ女なりハ七夕の手にもおとらじ聡明なりとおのこ
もおよばぬ算用なとのいやしからずとおのつ
から志もを自はせされとも人は下知をなさむとする
こゝろと撰ぶ人乃なし家に人の出入るゝ事
行きとゞのなまり頃たゆむべきこゝろ深くなりたまり
くるしからぬものハかわりとくしれたるはなきも
殺のるよおもくものなれたまびハおろかなる人より
見るもすけなくもあるなり此婦ハ天然上
器なれバ言を進るし大事の人の婦人にしても

賢人の妻としても難なれハ此婦をあら梅の花
を柳の糸にうつしたらこそやせん明るの夜の月さ
おもしげそのにかほりとり

一 六の婦ハ女郎花の風よみられるをしみして
てなしかのかたらふははかをとれる天然相ならて
生付ておもむかはりやくといふとも静かなる色みがら
かそへれ人のやどこゝろひてやすらかにお
しく良く姿和もかり天然の性癖しき
ものなるべし

一 そこのいふかたに附ハ静かなるまれつらそう
これらそひさうの婦のらうしさにまさるとも
おとらじ何ごゝろかまよいなくすきことにもおわらぬ

いひうけをひいくうしゃびはをいひうておほくも
いくびはくづれとろうとうてうつくしうはんぬ筆
ぬすまるまゝ結もてくさうなりうまうとりてるし
ぬるゝ女房を見んばかりかくべきしおりしるべいえう
結るのうなくゝ笑くゝ志はまうがあるまる形
うえのごとし今ハこをくにおつもせばいうま
らびいよくゝぬんうちぬるそあゝまりけま

一二乃姉のむとそう三人ハかるかあすゝせうなうう
つうしたすいつうしるゝ母よまうとうおうら
じと皆人いうう眉墨れ蓋う白しく細く麗ま
ゝに柳の糸乃みでれうがおくゝはりうべうまべ
こやゝるり用うとりてるゝれうさあゝれて

あるとすゝそこのせうとつにまりうて志うしあい
ゝまどゝあくゝでうづうさていうりこをゝ屋てう
そうにかうりうても色ゝまうくにハえせびうこむこと
のうこなりうまくゝどゝもあうしうはうさずはうとうがにだう
うく扇紳てロあうふすハせず
もはうゝゝこづうまうれうもあゝびそこれせうゝや
うれうれハもうくにうこうるうりばるせうとハ
おさるうれどおまやふ月うをまうる人うり人
のまくよ合するにいうまびのにしてくやけまで
おほく合しても女ようもうくなれうこうゝ
つうりのうれ類うあげうりをゝはうさん書せび
うこりのうこびうゝはうとるくゝ見いまず

歌麿よつゝぎすみそよつもずゝとるにひゝに目ありてワれようつゝびのとゝ月まで
にちゝしゝんおこせくかしらゝむうずたゝみざ
りもびゝうゝてゝらぬ人ゝゝびゝ称むこけまでな
らびせびこゝ色大きにせびいゝもろ文ゝらゝぐゝらし
ゝゝ月ゝゝりめゝしたゝむもゝもぬ文刑歌ゝ
ゝずゝくゝゝれせゝんのゝゝせび人いゝいむご
むゝゝてはゝゝおりゝくにおて男女にまゝつゝ
ゝゝゝ武蔵ゝくりんの行いゝづゝゝゝせびゝゝゝ
ゝゝゝにゝくゝじゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
文字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
碧を引抵ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

文し能ゝうれせうゝなどあそぶゝゝゝゝゝたゝ
ひゝれゝゝゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝのゝくゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝぶせゝゝのいゝくゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しらまれぐるうれさうふをこにめせとゆ
づさせとうちつひてよとるるしいまうん姫ま
のよぞやしいふそのらふせうとのまくそいぐうら
人めするせびたぐらてせうとにゆづうせうとのう
にいくいふまぐれるをれうへさうまうつてわを
おんうしうさめううとたてむまううひしいせ
ぬん男容ハけううもいうず女嘉ものうくまれる
人とて一りんの女ハ婦人をぐよりうあるうう
なぐれうぐくしておうこ女はせうとといつう
まあぐなれ人くうみか人といつうもとりて
るむ
初けけうしうさうちうらやまうのうと琴などうう

入てるうこうり光敬つうりるし紙ハ筆ハ上るれとよな
つまぐせにるうひうハ形者よづる彼しれあるうぐう
まれつうて生うこうれうこそこ乃せうとうんせうるう
大角のむとあるれハ女るハうくてもるんあうまれ
をようこうりあ上なぐいしくせうるまぐ女
にうやくおくれくうれ女婦なるれハ徒るあ
つるれるにうんよなぐなりうはあうずとはる
ぐ所なけまハうれうぐまれとハ紙ぐうしそこれせう
と今二うせ三せもひつぐるぐいてようんとく
くるるうしうんくうしれうきぐるうこうなむ

ゆりあらしといへども山せみとなきひさ
こあいぎこになん用ふこりてるしハおうづるの三人の姫君
のうなづくし山吹の咲こぼれく玉川のあらして洗
がごとし

一　そこの兄のたくしこハ皇孫の姫君なれバ話をもち
ふてそうく人見をもりてハおのづからづうくう
しこゆうなり二人の姫の姉にくらべれハうつ
さハをもうれども人ハなくてもこくいろと
さハ一さと出ぐくしく浮ひくまさなれ上らうち
うつくさハおくれてもこをてかうち用ふてりく
かくしをうなりちまをこつれあけまば
美ぐうるうぬてハなんのおさてにうくいひて

ゆけど雅なる女をもはうらるあるべしんとつけ治て
物しく人ハ人ハ位あるて行平ありとを拍子ハ筆琵琶あ
づまとをうづちしくうれるおかしまをたとふ目一ば
美のとぎうくなるべし蓮の花に胡蝶のあそぶる
いべさ

一　二の姫のむとをハうつくさハ二の姫乃姫よりて
三ちばりやおくれてをんけもでのこうなれいうて
くりくるをあるて立居ふるまひ移よをてをざ
うりくうくまもべすをうけくかうちこ
とをもようをハくるしほうくずうれ
うずとをハ口れたむとをなれバうしうりあり
にゆづりてをとをいもびをくべうむをてあれを

ひとうふぜひ口の四ちらちらとていてうつてあと
ひろうまみぞう虎用にひんおこせうおりちうとて
も美帆よりんざる細眉の達ちうさはぞうすぐ後と
て三ケ月のつちちうこはづうりのちうなさいとら
たげなり仮よむうひくりのすうちうてはて
法ゆとけをびうびんゆうびてもねうてうしうぐ
きうしうまうてうちうてけうれぐ
仮とあげてうくばりうこうおりひあぐうれ
ふぐんのげうこいさうぐううぐうてれりひうれぐ
けちうくいつしれすうともんようけうづうちうせざれを
下知となうちうまうおうぶりのうしこれちうこの
細毋表ようくまふゆううれ人の秘四とうまれて

もうぐうふせざれとも女ずをうぐめれいやしれをを
とうくうちうぐれハ下知あくほどくふつけてまた
ちうぬ拍ありとのうまふをまおうちうなぐしんて
いうあをうちうハ拍をけうるうるうぐをうちうづうりかうを
そこの水をんやうれりのふおりひうづをとひうぐ
孫節をなうちうひうちうやうまのふうをまうびうの
ををなうちうひうしうなうれて男女ゆうりうちうもの
ひうをとんうちうハうて和おうしうぐぬハうりうう雅楽わ
はまをうぐわゆふげぬいてうやうなり女ずハ和毋
に仙てうくうちうハ父表に仙くなうハうどうちうく
うりうをうハいぐうちうハ移田雅うもおうちうまぐうく
新まうをとのせうとに又んうまいうくいやしうぐ

おりつにおとづれのあるにより物あるそばよりあるべきを
きこえてゐんべきうの
けむりをあとに二の姫はいづまをいぢま
くいひぐさしうとうたちのうつくしれとうたとは
二の姫のうつくしきはゆきうべーうまいかくいつて
くるこーおまいはぶぐとこてゐけきうく
うまいはちやうまいとぎちやうにておりひやりうく
たくいふしれよりもんなくまつぐれをいやーちび
まくうりはくたのりれとこゐ多ーこれいふさ
えくうーくまづくれしつくあるはまどは
とくるくとうーまとうぬくちやせんされくなら
城のまれよりーハのきぐびよハあるびくいひりく

ゆるくみるまバこの姫乃ちくーハ母なくとぐれさ
ゐとこゐありくうくれすゐのちくーくうん猪ま
くりいづまをいづれとりれくこれどこれ姫ーこれ
姫のさくーくこ三人くはむをあとをおれよなと
せん我みうとくうあり
ふまきて源氏物語のくうあんでたれかく
をたくにとりおほうまあくくもいくおりよ
らんくーひやまぐくれどそのおりけをひせざ
まへんの細やうさハちれぐさーまをくうみ
よハ地といひぐうよハおぐくとりくう